

## 30年前の回想

佐々倉航三

今から30年程前のこと、私の中学時代のことであります。当時経済哲学の权威として知られた故左右田喜一郎博士が私達の中学へ口演に来られたことがあったのです。まだ紅顔の少年であつた私は温容悠々としてせまらず、所謂貴公子然とした博士の風格に深くみせられながらも、博士の口もとをみつけて話に聞きいったことを覚えています。“校長さんの話によるとこの学校の生徒はみな秀才ぞろいだから今日は一寸理窟をこねてみましょう”と冒頭されましたが、やがてカントの實踐理性批判の結論にある名句“それについてしばしば且つ持続して沈潜熟考すればするほどますます新たに増し来る讚嘆と畏敬とをもつて心情をみたす二つのものがある——わたしの上なる星空とわたしの内なる道徳律とがそれである”(天野貞祐 訳)がカントの墓石に刻まれていることを博士は穩かに和かに嚴かに語られたのであります。まことにそれは私にとつては天籟のように思えたのです。

たしか左右田博士は“それを思えば思うほど益々不思議なものが二つある……”というように言われたと記憶しますがなんというすばらしい詞でありましょうか。まことに私達自然科学に精進するもの、態度乃至心境はまさにカントのこの言葉のようでありたいと念じています。深く究めれば究めるほど大自然の攝理に対する驚異、不思議さはいよいよつのもるばかりであります。私達は又一方日夜良心の鏡に自己をうつして反省し、眞人間たらしめ給えと神に祈らなければならぬと思ひます。このカントの言葉の意義は特に自然科学者にとつては所謂座右の銘ともなすべきものでありませう。

地学教室からも肩爲の方々が夫々の道え向つて芽出度築立つてゆかれますがどうぞ學問のぼけ者になりさがるぬよう、お互にまず眞人間たるべきことを常に念じてゆきたいと思ひます。